

兵庫県佐用郡方言の「夕立・雷・稲妻」について

——同類同形語の問題——

鎌 田 良 二

(一)

兵庫県の西南部で岡山県に接する地域に佐用郡がある。この郡内で、夕立のことをユードチ・ヨードチがあり、このユードチ・ヨードチは雷のことをも、稲妻のことをもあらわす地点がある。また、カミナリで夕立のことをもあらわす地点がある。

これは、夕立・雷・稲妻という現象は同時に相関連しておこるものであるから一つの形になったものと思われる。

『日本語語地図』(国立国語研究所編)をもとにした徳川宗賢編『日本の方言地図』に、「小さい・細い・細かい」の言語地図が出ている。

「箱が(小さい)」「棒が(細い)」「網の目が(細かい)」を九州ではすべてコマイという。異なる意の語をすべて同形で言うことになる。

しかし、これを、小さい・細い・細かいと分けて言うことは九州の人の目からすれば、同じようなものをこまかく分けて言っていることになるとも言えよう。

九州で、この三つをすべてコマイと言うことと、同じような現象が東北にもあるので、いわゆるA B A型分布になっていることになるから、古くは中央の京都でも同様に一つの形であったものだということになるのである。それが、中央で生活文化が複雑になるにつれてそれを言い分けるようになったものである。その必要性にせまられて語形を分けるようになったものであろう。

荷物を肩にかつぐ場合、一人で肩に材木をかつぐ場合と、二人で荷ない棒で間に荷物をつるしてかつぐ場合と、一人で荷ない棒の前後に荷物をつるす天秤型の場合とで異なる語形があるかどうかということは、こういう荷をかつぐという場面が多い地方では異なる語形が生まれるのであろうと思われる。

出世魚といわれる、同じ魚が成長するにつれて名がかわっていくというのも、その魚をそれぞれの段階で利用しているということからくるものであろう。

「小さい・細い・細かい」を同類の語と考え、これを異なる語形で言うか、同じ語形で言うかということを問題にするので、このようなことを同類異形語・同類同形語ということにする。

(二)

標準語形と方言語形との間には次のような関係がある。



上を標準語形、下を方言語形とすると、①は全く同一物を標準語形と方言語形とが別の語形となるものである。カ

ボチャ(南瓜)に対してポーブラ。ジャガイモ(馬鈴薯)に対してニドイモというように或る地点で標準語形と方言語形とが一对一の関係であるという場合である。

このような場合、国語教育の面では、全国に通じる方の標準語形をとった方がよいかもしれない。

②は、標準語形では二つに意味分化していてそれぞれの語形があるのに対して、方言ではその意味分化をせずに一つの語形で言う場合である。

例えば、御飯をタク、大根をニルと二つに言い分ける標準語形に対して、これを両方ともニルという地点がある場合である。

この場合、表現の豊かさという点から、標準語形の二つに分けた方をとる方がよいかと思う。

③の場合は、②の反対に、標準語形では一つの言い方しかないのに方言語形では二通りに言い分けるという場合である。

標準語形ではイタイ(痛い)という一つの語形しかないのに対して、広島では、歯が痛いことをハシルといい、その他のときはイタイというように二つに分けていう言い方があるという。この場合は、②のときと同じ理由で表現性の豊かな方の方言語形をとった方がよいと考えられる。

また、標準語形では「里芋」をサトイモという言い方であらわしているのに対して、或る地点では、里芋の茎からまっすぐ下にある芋を、ズイキイモと言ひ、その中心の根から分かれた細い根につく芋をコイモという。ズイキイモとコイモとを言い分けるという場合も、ここで言う③にあたる。

このように表現がごまかいほど言葉としていろいろと便利なことは言うまでもない。それに必要ならばこそこのように細分化されてくるのである。

しかし、また反対に、大きな包括的な語も必要であることは、日本語の「こと」「もの」という語がいかに大きな役

割を果しているかは言うまでもない。

次に、標準語形にはその対象物に対する直接の名称はないが、方言形としてはあるもの、例えば、密柑の外の皮をむいた中の一房をつつむ薄い皮、これを和歌山県ではスブクロという。

これは、その地域ではそれを言う必要があるとか、和歌山県のように密柑の生産が多く密柑との関連が多いという地域にこういうことが多いと考えられる。

なお、対象物がありながら、それを直接にあらわす名称がないという場合は「何の何」という形であらわすことになる。

(三)

兵庫県の西北部と西南部とに、夕立・雷・稲妻を同語で言う地域がある。

この三つの現象は同時におこることもあることから、これがまぎれるということもあり、一語形で言うようになったものかと考えられる。

しかし、夕立は降る、雷は鳴る、おちる、稲妻は光る、という語がつくのであるが、これらの動詞を省くことによつて、この三現象が同語になり得るものである。そうしていったん同語として成立してしまつた後は、ユーダチが鳴るのような形も可能になるのである。

実際の現象としては、夕立が降つても、雷は鳴らず、稲妻も光らないことはたびたびあるが、(図1)にみる通り、これを同語形で言う地域は山間部である。

(図1)の▼地点は、夕立と同時に雷が鳴るとか、時には落雷もあるという山間部である。

本年（昭和五十六年）七月に調査に出かけた折にも、昨年、落雷があり大きな被害があったという話を聞いた。このような地点で、この三つの現象を同語で言うことが行なわれるのであろう。

一般には、同類の現象を分けてそれぞれ別の語形で言う場合は、それについての分化が進んでいて表現が細かく豊かであるということになるし、その反対に、同類のものを同じ語形で言うということは、その分化が進んでいないで、それらにあまり関心がないという場合、または、その物自身がないといういわば消極的な姿勢の場合である。

例えば、手拭が凍ると、水が凍るとを言いわけて、手拭の場合はイテルとかコゴルを使い、水の場合はコオルを使うというような場合、このように使い分けをする地域は、「凍る」という現象が多いところであると見られる。

ところが、兵庫県西北郡、西南部の場合は、このような一般的な場合と違って、夕立・雷・稲妻が殆んど同時にあらわれるということからおこったものかと考えられる。

なお、ついでに言うならば、地域による名称の違いに、冬の凍傷に「しもやけ」があるが、積雪地域ではこれをユキヤケということがあり、また、竹馬が、竹の少ない東北地方ではキウマ（木馬）ということなどその地域性によるものがあることも考えねばならない。

そのものの種類が多い地域ではその名称が分化するということは、大きく言えば、日本のような漁業の盛んな国では魚の名称が分化しているし、樹木の種類とともにその名称も多いということになるし、その反対に鉱物名の和語は少ないということも同じことである。

(四)

(図1)(図2)は兵庫県下(淡路島を除く)における、「夕立」と「雷」とについての分布図である。西南部にかこ

ったところがあるが、これが佐用郡である。(県下調査地点名は『甲南女子大学研究紀要第一七号』にある)

(図1)の「夕立」については、ユーダチ・ユダチ・ヨダチ・ヨダチとソバエとがある。

この中、ソバエを除くと、ユーダチ系とヨダチ系となる。この二系は特別なかたまり分布をもっていない。ソバエは西南部の赤穂市付近に一箇所あるのみである。

ヨダチは播磨地区にみられるものであり、県全体から見ると南部のものであるが、ヨダチが県全体にひろがっている。しかも、この図でみる限りヨダチ系とユーダチ系との地域を二分することは困難なようである。このことから本県ではこの二系統は同語と考え、ユーとユーとを音韻の違いの程度にしか意識していないように見受けられる。

ただし、『日本語地図』で見ると、ヨダチは近畿、ユーダチは関東・中部、それに、中国・四国・九州にある。即ち、A B A型分布をなすものである。この『日本語地図』で見ると、ヨダチが新しく、ユーダチが古いと見受けられるのである。

ユーダチには「夕方」の「夕」、ヨダチには「夜」の「ヨ」の意識があるのだろうか。

(図2)は、兵庫県下の「雷」の地図である。

これには(図1)の「夕立」と同じ記号を用いて、「雷」のことをユダチ、ユダチ、ヨダチ、ヨダチという場合のものを書き入れてある。

「雷」のことをユダチ・ヨダチなどと言うほかに、カミナリ・カミナリサン・カンナリ・カナレ・ゴロゴロサン・ドンドロケ・ドンドロキがあり、京都府側にハタガミ・ハタガメがある。

ドンドロキ・ドンドロケは鳥取県側である。

(図2)では、「夕立」も「雷」も両方とも「ヨダチ」という地点については▼で記した。日本側の一地点を除くと、いずれも中国山脈の延長の山間地帯にある。

ゴロゴロサンは一般的な名称であるため神戸市と岡山県側という離れた地点に別々に存在する。京都府側のハタガミのようなまとまりをなしていない。

『日本語地図』によると、「雷」のことをヨーダチというのは、兵庫県のこの辺りだけで鳥取県まで続いている。(図3)に、兵庫県佐用郡の調査地点番号を記し、(表)にその地点の「夕立」「雷」「稲妻」の語形を記した。

佐用郡の中央やや南寄りに東西に国鉄姫新線が通っている。郡内には東から三日月、播磨徳久・佐用・上月の各駅がある。佐用は急行停車駅である。

東から三日月町(人口、三千九百人)、南光町(四千九百人)、佐用町(九千八百人)、上月町(六千八百人)である。

郡内の主産業は農業である。郡の北部は山地になっているところが多く、この辺りの部落は谷間にあることになる。

(表)について。

調査地点番号は、(図3)に番号をとばして記してあるが、1・3・6の辺りに2・4・5があると見ていただきたい。

「夕立」には、ユーダチ系(ユーダチ・ユダチ)・ヨーダチ系(ヨーダチ・ヨダチ)・エダチ・シグレ・カミナリがある。

「雷」には、ユーダチ系・ヨーダチ系・カミナリ・カラオダチ・イダテ・イナピカリ・ピカピカがある。(図1)(図2)には、カラオダチ以下はあらわれていなかった。

「稲妻」には、ユーダチ系・ヨーダチ系・カミナリ・イナピカリ・ヒカヒカ・ピカピカがある。

『日本語地図』によると「稲妻」で、ヒカヒカ類は全国的に少なく、兵庫県のこの辺りにあるのみである。

ピカピカは広島にあり、イナピカは近畿を中心に中部・中国・四国にある。これもABA型分布をなしていることになる。

先にも記したように、本県の分布からは、ユーダチ・ヨーダチが入りまじっているもので、これを一つに見て、これ

とその他とに分ける。即ち、ユーダチ・ヨードチ対カミナリというように、「夕立」も「雷」もユーダチまたはヨードチというならこれを一種類の語形で「夕立」と「雷」とをあらわしていると見て、「種類」の欄では一種類と数える。「夕立」「雷」をユーダチといい、「稲妻」をイナビカリというなら「種類」は二種類となる。「夕立」をユーダチ、「雷」をヨードチ、「稲妻」をイナビカリでも二種類と見る。

「N」は、この語について調査しなかったか、答えがなかったものである。三語の中、一つでも「N」があるものは、他の二語についての種類数であるのでマルでかこんだ数で示した。「型」については次のようにした。

				「夕立」
	△	○	○	○
	△	△	○	○
	△	△	△(X)	○
	D	C	B	A
	語型			

三つとも同語形のをA、「夕立」と「雷」とが同語形をB、「雷」と「稲妻」とが同語形のをC、そして、Dは、Aとは違った語形で三つとも同じものとした。

三つとも違った語形のものは無印とした。

実際にあらわれた形は次のようになっている。

	「夕立」	「雷」	「稲妻」	語型
ユーダチ (ユーダチ)	ユーダチ	ユーダチ (ユーダチ)	ユーダチ (ユーダチ)	
ユーダチ	ユーダチ	イナビカリ		B
ユーダチ	カミナリ	カミナリ		C
カミナリ	カミナリ	カミナリ		D

右の結果、A型は上月町という郡の西側、岡山県境に近い方にある。B型は各地に見られるが、郡の東側の三日月町に多いようである。

地点番号39の佐用町福沢でBをマルでかこんだのは、「夕立」「雷」をカミナリ、「稲妻」をイナビカリという他のB型とは異なるものであるからである。

A型は上月町に五地点(三十地点中)、B型は上月町に十地点(三十地点中)、佐用町に十三地点(二十七地点中)、南光町に十一地点(十四地点中)、三日月町に五地点(十一地点中)、そして、D型は三日月町に一地点あるのみである。

本調査はすべて臨地調査によるものである。(図1)(図2)の全県調査の調査協力者は次の六名である。

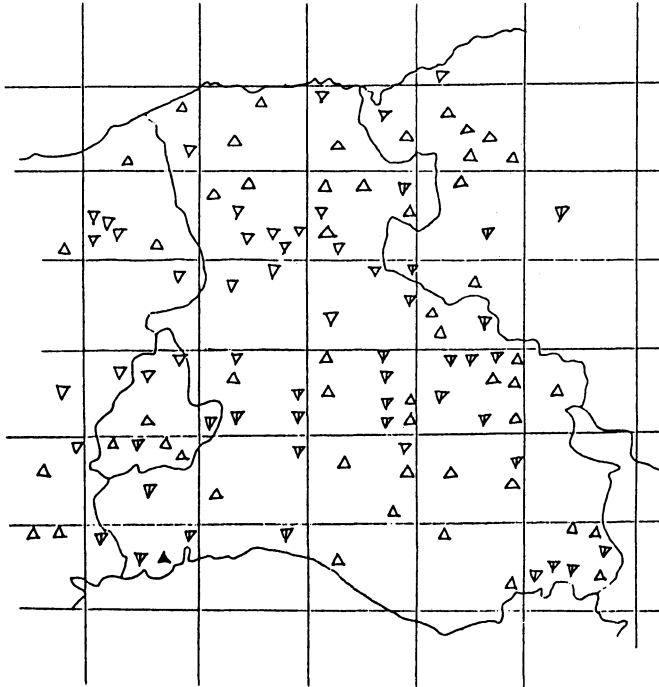
今西典子・岡本佳子・緒方みどり・守本照美・吉井貴子・吉川理子

(表)を作るについて佐用郡のみの臨地調査についての調査協力者は次の通りである。

秋田千尋・今村徳子・植田裕子・監物桜子・田中美舟・中島ゆかり・益田靖子

なお、被調査者は一地点一名で、(図1・2)の全県調査で百十五名(表)の佐用郡で八十二名の方である。ここに厚く謝意を表する。

(図1)
「夕立」



(図1, 2 共通)

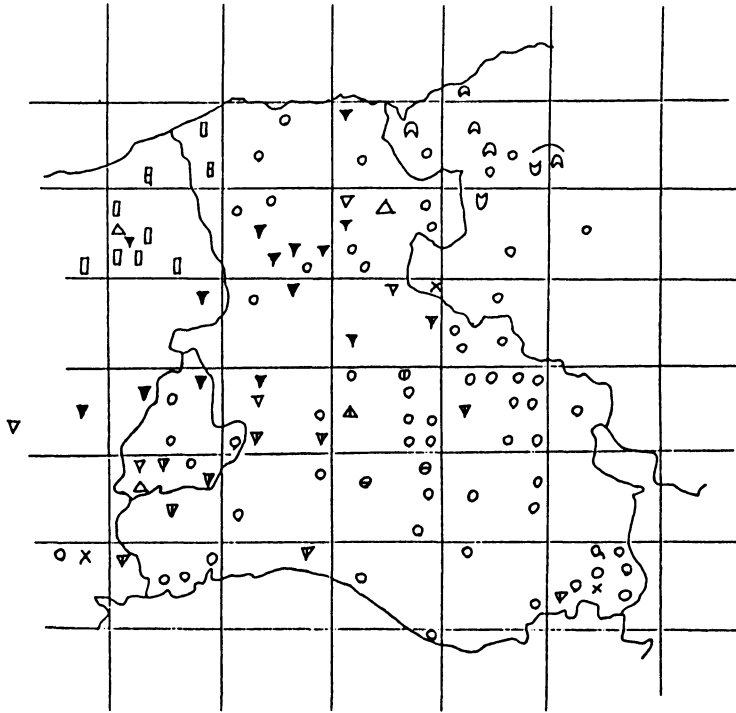
- | | |
|---------------|----------------------|
| ○ カミナリ、カミナリサン | ▼ 雷も夕立もユーダチとい
う地点 |
| ⊙ カンナリ | × ゴロゴロサン |
| ⊖ カナレ | □ ドンドロケ |
| △ ユーダチ | ⊖ ドンドロキ |
| ▲ ユダチ | ∩ ハタガミ |
| ▽ ヨーダチ | ∩ ハダガメ |
| ▽ ヨダチ | |
| ▲ ソバエ | |

被調査者は二名を除き他は全員、男性である。年齢は五十七才から八十三才までであるが、ほとんどは六十五才から七十五才の間である。職業は殆んどが農業である。

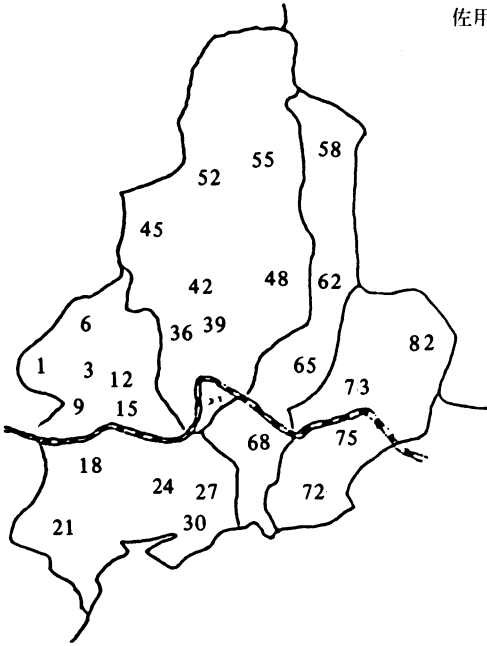
(図3)は、佐用郡であるが、この図が小さいため適宜地点番号を記した。1・3・6などと記したが、2・4・5はこの付近と見ていただきたい。

(図2)

「雷」



(図3)
佐用郡地点番号



ピカピカ	ヒカヒカ	イナビカリ	カミナリ	ヨ一ダチ	稲妻 ユ一ダチ	ピカピカ	イダテ	カラオダチ	カミナリ	ヨ一ダチ	雷 ユ一ダチ	カミナリ	シグレ	エダチ	ヨ一ダチ	夕立 ユ一ダチ	種 型 類	地点 番号
					N					○					○		①	30
		○							○						○	○	3	31
		○				○			○					○			3	32
		○							○						○		2 B	33
		○							○						○		3	34
		○							○							N	②	35
	○								○						○		2 B	36
		○							○						○		2 B	37
		○							○						○		3	38
		○							○			○					2 (B)	39
			○						○						○		2 B	40
					N				○						○		②	41
		○							○						○		3	42
	○								○	○					○		2 B	43
		○							○						○		3	44
		○							○						○		3	45
		○							○						○		2 B	46
		○							○						○		3	47
		○							○						○		2 B	48
○									○						○		3	49
		○							○						○		3	50
	○								○						○		3	51
		○							○						○	○	2 B	52
		○							○						○		2 B	53
		○							○						○		2 B	54
		○							○						○		2 B	55
		○							○						○		2 B	56
		○								○					○		2 B	57
		○					○								○		3	58

